

世界地図「帝国連合」を読む

青山学院大学教授

平田 雅博



この地図は、1886年のイギリス帝国の領域を示す「帝国連合」と題する世界地図である。地図上の右上に窓をつくってはめ込んでいるもう一つの小さな世界地図は、同じくイギリス帝国ながら、これよりちょうど百年ほどさかのぼった1786年の領域を赤色で示している。これを1886年のピンク色で塗られた地域と比べてみると、この百年でイギリス帝国領土が拡大された地域、とりわけカナダ、インド、オーストラリアといった地域の拡大が一目瞭然とわかるようになっている。

本国イギリスはもとより、イギリス帝国領の北アメリカ、西インド、西アフリカ、南アフリカ、インド・セイロン・海峡植民地、オーストララシアのそれぞれに窓枠を作り、その中に面積、人口、貿易額、とくに本国との輸出入額のデータをこまかに書き込んでいる。

この地図は、日本で見慣れた日本を中心とした世界地図ではなく、イギリス本国を中心に置いた世界地図である。イギリス人にはこちらの方が通常の世界のイメージを提供した。2年前の1884年に、国際的な本初子午線として、ロンドン郊外の王立グリニッジ天文台を通る子午線（経線）を基点とする案が採用され、この基点はグリニッジ子午線と呼ばれた。この地図もグリニッジ子午線を中心としたメルカトル図法を採用して、世界の中心となったイギリス・ロンドンから東西に広がったイギリス帝国を書き込んでいる。

メルカトル図法は、高緯度に向かうにつれ、長さや面積が拡大されて表示されることになり、この地図でもカナダの面積が強調されるが、船舶航行を示すには適格的である。この世界地図には、本国を基点とする大洋航行の線とその距離数が書き込まれて

いる。とくにイギリスからインドへの道が基軸となっており、ジブラルタル、マルタ、キプロス、ペリム、アデン、ボンベイの地中海から紅海を経てインド洋に抜けるルート、アセンション、セントヘレナ、ケープ植民地、モーリシャス、ガルシアディエゴ、セイロン、マドラスの大西洋からインド洋へのルートが書き込まれ、他の各地も船舶の航行で結ばれている。諸海に浮かぶこれらの島々や港は、赤い下線が引かれて、イギリス領であることを示す。これらの海軍の寄港地や貿易の拠点を結んで、大洋間に張りめぐらされた船舶航行の線は、陸地ばかりか海の支配にも獅子奮迅したイギリス帝国の守備範囲をそのまま物語る。

1869年に開通したスエズ運河、および鉄道では唯一、1885年に開通したばかりのカナダ太平洋大陸横断鉄道が地図に書き込まれているが、この運河と鉄道も世界レベルの船舶の航行を補完しているにすぎない。

今度は地図の欄外に鮮やかに描かれた装飾を見よう。欄外というより地図の方に大きくはみ出している絵と言うべきである。まず上部欄外を見よう。当時、軍艦の乗組員の寝台としてよく使われたハンモックに揺れる3人の女性が持つ字幕には、それぞれ「自由、博愛、連合」と書かれている。この組み合わせは、フランス革命の「自由、平等、博愛」と似ているが、このイギリス帝国には「平等」はさすがにない。「平等」の代わりに「連合」が選ばれた。帝国連合同盟というイギリス帝国の連合を推進する団体が、1884年にロンドンで創設され、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどに支部が置かれた。イギリス国内で「平等」の理念はむずかしいが、「自由、博愛、連合」であれば、それらの理念はイギリス帝国の中で平和的に共存する。

ついで、欄外底辺に目を転じよう。その中央部に鎮座するのは、イギリス帝国の女神であるブリタニアである。「統べよ、ブリタニア！大海原を支配せよ」と愛国歌に歌われたブリタニアは、イギリス帝国を象徴するかぶとをつけ、イギリスの国旗ユニオンジャックが書き込まれているため、およびグリニッジ子午線と平行させて描かれたすっと立てた三又のほこを持っている。三又のほこは諸海を支配するシンボルである。

ブリタニアは「人間の労働」と書かれたたすきを掛けたアトラスが担ぐ「世界」と書かれた地球儀

の上に座っている。「人間の労働」が「世界」を支えていることを示す。アトラスは、ギリシャ神話に出てくる、神罰によって天空を肩に担がされた巨人神である。ブリタニアの両側にいて見上げているのは、孔雀の羽と椰子の葉からつくられた巨大なうちわで風を送る2人の黒人女性である。2人は巨大な魚の上に座っている。

この黒人女性たちの両側に描かれた人々と動物たちはイギリス帝国内の人々と動物である。左側の上から見てみよう。上の方から、弓矢を持つカナダのインディアン、獲物を肩にかけた狩人、毛皮を着た女性が描かれ、その間にはトナカイやラッコかあざらしのような動物も描かれている。右側下には、軍服を身につけたさっそうたる兵士たちが登場している。そのすぐ左側には、兵士とは対照的に、一つの重い荷を2人で背負っているターバン姿のインド人が描かれている。

その隣には首輪をかけた虎を鎖で引き連れたイギリス人、その後ろには、のぼりを持って象をあやつるインド人の姿が見える。象の背中には、藩王を乗せて公式謁見に連れて行く豪華な椅子が設置されている。公式謁見とはイギリス国王の代理人である副王＝インド総督にインドの藩王が会いに行く儀式的な会合で、1877年に開催されて、藩王たちが象の背中に乗って副王に会いに行った。

さらに今度は右側欄外に目を転じると、上から、キプロスと書かれた器をもつ女性、右手に扇子、左手にお盆をもつ、キモノを着た日本人女性などが描かれている。イギリスは1878年にキプロス島の統治権を獲得しているため、この地図上でも赤い下線が引かれている。日本はもちろんイギリス帝国の一員ではなく、唯一書き込まれた日本の地名である横浜も赤い下線は引かれていない。ただ、1885年にウィリアム・サリヴァン脚本のオペレッタ『ミカド』が上演され、イギリスでは空前の日本熱＝ジャポニスムないし一種のオリエンタリズムが起きていた。扇子を持ち、ゆるやかなキモノをまとったこの女性は『ミカド』のポスターに描かれた女性と酷似している。

その下に描かれている、ぶどうの木に囲まれ、ぶどうの冠を付けた女性は、羊毛製品とおぼしき衣服、五つの星の南十字星が描かれた肘掛けに寄りかかっているなどから、オーストラリア女性である。彼女が口にしてるのはワインであろうか。ワインとす

れば、当時ワインがイギリス帝国内で生産されていた、キプロス、マルタ、南アフリカ、オーストラリアといったところのワインの中でも、オーストラリア産ワインは1880年代にはフランスの品評会で数々の賞をとるにいたっている。

右側一番下には、川に流れる砂金をすくうスコップを持った男性が描かれている。オーストラリアのゴールドラッシュは、1851年のニューサウスウェールズ植民地における砂金の発見に始まった。すぐさまオーストラリア各地には一攫千金を狙う金鉱掘りが大量に集まってきた。その結果、100万人もの人々をオーストラリア大陸に流入させた。

その横には、羊毛製品を手にする白人女性、その隣にはブーメランを持ったアボリジニーの女性も描かれている。彼らと近接して羊やカンガルーが描き込まれている。カンガルーはオーストラリア特有の動物だが、羊は植民地となってから持ち込まれた動物である。

欄外には、他にも多くの動物が描かれている。イギリス人の支配者はインドに行くとき晴らしに虎を撃つように、虎撃ちはインド支配の儀式化に欠かせなかった。ここでも虎は首輪を巻かれて鎖で管理されている。虎は、銃で武装する管理者をにらみ付けているが、劣勢は明らかである。それどころか、左の黒人女性もがたれかかっている敷物を見ると、これは虎の顔の剥製ではないか。これは虎の行く末を示している。

象は天蓋付きの豪華な椅子を背負わされ、頭巾をかぶらされており、御者のいいなりになっているばかりか、その象牙は左側に描かれた果物を盛りつける器になっている。同じように、孔雀は巨大なうちわにその羽が利用されている。羊は多様な人々に羊毛製品を提供しているし、ラッコは毛皮となって寒地の人々が暖をとる衣服となっている。こうして生きている動物とその死後の活用を並列して描くことで、イギリス帝国内における各種の動物の資源としての活用を明示する。

動物資源は男女の衣服となって活用されているが、重い荷物を担いで苦役にたえるインド人男性は裸足、アボリジニーの女性は半裸である。しっかり身体を覆った着衣と身体を覆わない着衣は文明と野蛮の対照性を表している。狩猟に使う武器も、一方のイギリス人の銃、短銃の進歩性と他方のインディアンの弓矢、アボリジニーのブーメランという遅滞性は対

照的である。

ここに描かれている人々やモノを見るだけでも、史上最大の帝国としてイギリス帝国がおどろくほど多様性に富む統一体であることが知りうる。その領域が寒帯から熱帯まで覆うために、トナカイ、羊など動物資源が多様であり、小麦、ぶどうのほか稲、とうもろこしとおぼしき植物も描かれ植物資源も多様である。よく見ると欄外左の底辺部には、錨の他に、海草、貝やたこもいて、海の資源も多様である。金の他、ここには描かれていない銅、錫、ダイヤモンドなど鉱物資源も豊富である。これらの自然資源は「人間の労働」によって活用されて、農業、漁業、鉱工業などの諸産業となり、ひいてはイギリス帝国の力の源となっている。

労働にたずさわる人々も、インディアン、アボリジニーなどの原住民から、苦役に狩り出されるインド人、カナダやオーストラリアに渡ったイギリス人移民にいたるまで、ほとんどの人種が含まれている。ピンク色に塗られたこれらの地域ではいまでこそ英語が話されているが、当時は彼らが話した言葉はきわめて多様だったはずである。信じていた宗教も多岐にわたっていた。

イギリス帝国をこの地図によって一望することは、当時の世界のほとんどの自然資源とその活用にたずさわった多種多様な人々を一度に見ることででもある。しかもこれらは単にばらばらに存在していたのではなく、相互に結びつけられていた。この地図に描かれたイギリス帝国間に張りめぐらされた船舶航行の線に沿って、人々が運ばれ、とりわけ本国へあらゆるモノが運ばれ、交流があったからである。イギリス帝国は、内部で序列を構築しながらも、ゆるやかな統一体の中でこういった交流ひいては連合を実現しようとしていた。

出典：Imperial Federation, map of the world showing the extent of the British Empire in 1886；Author: Colomb, J. C. R.；Publisher: MacClure & Co.；Date: 1886.；Location: Great Britain

ネット上ではたとえば以下がある。拡大して見ることも可能。
<http://www.flickr.com/photos/normanbleventhalmapcenter/2710800068>

<http://maps.bpl.org/id/M8682/>